

中国語母語話者による日本語の関係節の習得について

——日本語の壁を越えられるのか——

陳 雲 川*

はじめに

日本語と中国語の関係節は表面上は似ているが、深層構造が異なると考えられている。Fukui & Takano (2000) と Murasugi (2000) は、日本語の関係節の主名詞は関係節の外で生成されると分析している。しかしながら、Aoun & Li (2003) では、中国語の関係節の主名詞は関係節の内部から外へ移動されると主張している。その主名詞の生成メカニズムの違いによって、主名詞の中にある再帰代名詞「自分」の解釈は異なってくる。日本語では関係節の主名詞の内にある再帰代名詞「自分」は関係節の主語を指すことができないが、中国語では再帰代名詞「自己」(ブージー) はできると指摘されている。つまり、関係節の主名詞の再帰代名詞の解釈は日本語のほうが中国語より制限される。この相違が授業などによるインプットがない限り、日本語を第二言語として学ぶ中国語の母語話者にとって、習得困難な点となると予測される。そこで、本研究では真理値判断による実験で検証を行った。実験の結果、中国語母語話者は母語の影響にかかわらず、日本語の制限を習得できることが明らかになった。

先行研究

日本語の関係節の主名詞は関係節の中から移動されるのではなく、関係節の外で生成されると先

行研究が分析した(Fukui & Takano, 2000; Murasugi, 2000)。それを支持する有力な証拠の一つは主名詞の中にある再帰代名詞の解釈である。

(1) ジョンがタイプした自分の論文

(1)の関係節の主名詞にある再帰代名詞「自分」は関係節の中の主語「ジョン」を指すことができないと指摘された(Hasegawa, 1988; Hoji, 1985)。

つまり、(1)の「自分の論文」は「ジョンの論文」ではないということである。一方、中国語の関係節は日本語のように関係節の外で生成されるのではなく、関係節の内部から移動されると分析された(Aoun & Li, 2003)。それを支持する有力な証拠の一つも主名詞の中にある再帰代名詞の解釈である。

(2) 约翰 打的 自己的论文。 ジョン タイプした 自分の論文

(2)は(1)と同じ、「ジョンがタイプした自分の論文」という意味である。しかし、中国語の関係節の中の再帰代名詞「自己」は、日本語の「自分」と異なり、関係節の中の主語を指すことができる(Aoun & Li, 2003)。つまり、(2)の「論文」は「ジョンの論文」を指すことができる。

以上の先行研究から、関係節の主名詞の再帰代名詞の解釈は日本語のほうが中国語より制限されることが判明した。日本語は関係節の主名詞の再帰代名詞「自分」は関係節の主語を指すことがで

*ハワイ大学マノア校院生

きないが、中国語は関係節の主名詞の再帰代名詞「自己」はできる。

研究課題

先行研究で観察された日本語と中国語の関係節主名詞の再帰代名詞の解釈の相違が日本語を第二言語として学ぶ中国語母語話者にとって、習得困難な点になり得るのではないだろうか。

まず、中国の大学で日本語を教える講師によると、中国の日本語の教室ではその日本語と中国語の相違が教えられない。次に、中国語には日本語のような制限がないため、中国語母語話者はその日本語と中国語の相違を習得するのが非常に難しいだろうと予想される。

本稿の研究課題は以下の通り。

- (I) 中国語母語話者は日本語の関係節の主名詞の内にある再帰代名詞「自分」が関係節の主語を指すことができないという制限を習得できるのか。
- (II) 中国語母語話者は日本語の関係節の主名詞の内にある再帰代名詞「自分」を解釈する時、母語中国語からの影響があるのか。

実験の方法

研究課題を探求するため、真理値判断による実験 (Crain & Thornton, 1998) を行い、検証した。被調査者は中国四川省にある三つの大学で募集した日本語科の学生で、計69名。Marsden (2004) の日本語能力テストによって上級学習者35名と中級学習者34名に分かれた。また、東京にある大学で日本語母語話者を28名募集した。

実験にはよく知られるディズニー人気キャラクター、ミッキー、ミニー、ドナルド、デイジーを使った。そのディズニーキャラクターたちは自分の品物に自分の写真を貼るのが好きだという状況を設定し、被調査者に伝えておいた。実験項目の一例を挙げ、説明する。



- (4) デイジーがミッキーが洗った自分の帽子を汚した。

項目ごとに絵と文が現れ、絵と文が合っているかどうか被調査者に判断させる。各項目に2条件が作られた。条件1では、関係節外の主語の品物を示す絵が現れる。(4)の関係節外の主語は「デイジー」のため、(3a)と(4)は条件1である。(4)の「自分」は関係節外の主語「デイジー」を指すことができるため、日本語母語話者の被調査者は「合っている」と判断すると予測できる。また、条件2では関係節の主語の品物を示す絵が現れる。(4)の関係節の主語は「ミッキー」のため、(3b)と(4)は条件2である。(4)の「自分」は関係節中の主語「ミッキー」を指すことができないため、日本語母語話者の被調査者は「合っていない」と判断すると予測される。

本実験では合計24の項目が作られた。被調査者にはそれぞれ項目ごとに1条件のみ展示するように、2リストを作成した。それで、被調査者は条件ごとに12の項目について判断することになった。各リストに36のフィラーも含まれた。

また、中国語母語話者の第二言語の日本語についての判断のみならず、母語、中国語についての判断も必要なため、日本語版、中国語版、両方作成された。各項目の日本語の文をなるべく忠実に中国語の文に翻訳した。(4)の例文は次のように翻訳した。

- (5) 黛丝鸭 弄脏了 米奇 洗的
 デイジーが 汚した ミッキーが 洗った
自己的帽子。
 自分の帽子

先行研究によると、関係節の主名詞の「自己」は関係節外の主語「黛丝鸭 (デイジー)」、関係節

中の主語「米奇（ミッキー）」、どちらも指すことができる」と指摘された (Aoun & Li, 2003)。つまり、条件にもかかわらず、中国語の母語話者はすべての項目について「合っている」と判断すると予測される。

日本語母語話者は日本語版の実験に参加し、日本語学習者は日本語版と中国語版、両方の実験、そして、日本語能力テスト (Marsden, 2004) にも参加した。

結果

最初に、日本語母語話者のデータを報告する。次の表でまとめた。

条件 1 と 2 の平均値の差は T 検定で有意であった ($t(27)=22.76, p<.01$)。さらに個人のデータも分析した。条件 2 の項目は 12 もあるため、二項分布によると、被調査者は「合っていない」という選択を 8 回以上選べば、被験者は、関係節の主名詞の「自分」は関係節の中の主語を指すことができないと知識があることが確認できる。データを分析した結果、28 名の日本語母語話者のうち、24 名が条件 2 の項目をめぐって 8 回以上「合っていない」を選択した。つまり、日本語関係節の主名詞の再帰代名詞「自分」は関係節の中の主語を指すことができないことが示唆され、先行研究の結果が支持されたと考えられる。その一方で、27 名の日本語母語話者は条件 1 について 8 回以上「合っている」を選択したので、「自分」は関係節外の主語を指すことを理解していることが確認できた。

次に日本語学習者のデータについて報告する。

表 1. 日本語母語話者による各条件の判断

条件	「合っている」と判断する 平均値(標準偏差)	標準誤差
条件 1	11.25 (1.11)	0.21
条件 2	1.25 (1.55)	0.29

結果は下記表にまとめた。

日本語学習者のデータに要因が、「言語の種類（日本語か中国語）」と「再帰代名詞の先行詞の位置（関係節の外の主語か中の主語）」、二つある。

まず、中級学習者のデータを分析する。二元配置反復測定分散分析で、二要因、「言語種類」と「先行詞の位置」は交互作用はない ($F(1, 33)=0.68, p=.416$)。また、T 検定で条件 2 について、日本語と中国語の差は有意ではない。要するに、中級学習者にとって、日本語関係節の主名詞の「自分」は関係節の内の主語を指すことができるということが示唆された。つまり、中級学習者は母語の中国語の文法知識を用いて、日本語の関係節の主名詞の「自分」を解釈すると言えると考ええる。

最後に上級学習者のデータを分析する。二元配置反復測定分散分析で、二要因、「言語種類」と「先行詞の位置」は交互作用があると判明した。T 検定によると、日本語の条件 1 と中国語の条件 1 の平均値の差が有意ではなかった ($t(34)=0.636, p=.529$) が、日本語の条件 2 と中国語の条件 2 の平均値の差が有意であることがわかった ($t(34)=3.46, p<.01$)。つまり、上級学習者は日本語と中国語の再帰代名詞の解釈の違いを理解していることがわかった。そのため、中国語を母語とする日本語学習者は日本語が上達するにつれ、日本語関係節の主名詞の「自分」は中国語の「自己」のように、関係節の主語を指すことができないと考えるようになる結論できる。

表 2. 中国語を母語とする日本語学習者による各条件の判断

組	日本語		中国語	
	条件 1	条件 2	条件 1	条件 2
中級	10.09 (2.48)	9.88 (3.02)	10.03 (2.46)	10.35 (2.53)
上級	9.57 (3.34)	7.4 (3.8)	9.91 (2.16)	10.06 (2.63)

考察

実験の結果は以下の通りである。

- (i) 中級学習者は母語からの影響を受け、日本語関係節の主名詞の「自分」は関係節の中の主語を指すことができると考えていることが判明した。
- (ii) 上級学習者は母語からの影響も受けたが、日本語関係節の主名詞の「自分」は関係節の中の主語を指すことができないと考えるようになったことがわかった。日本語学習者はインプットがないものの、「自分」の制限が習得できることが確認できた。

本稿は真理値判断による実験を通し、以上の2点を究明したが、課題はいくつか残っている。

- (i) 中国語を母語とする日本語学習者にとって、インプットがない限り、どのように日本語の制限を習得しているのか。
- (ii) 中級学習者のデータによると、母語の影響は否定できない。ただ、ほかの言語を母語とする日本語学習者のデータと比較すれば、母語の中国語の影響がもっと明らかになるのではないかと考えられる。
- (iii) 上級学習者は日本語と中国語の再帰代名詞の解釈に違いを理解できるようになっているが、日本語母語話者の判断とは少し差異がある。今後、もっとレベルの高い学習者、あるいは、日本語と中国語のバイリンガルのデータを収集したいと考える。

終わりに

先行研究によると、日本語の関係節の主名詞の再帰代名詞「自分」は関係節の主語を指すことができないが、中国語の再帰代名詞「自己」はできる。本研究では中国語を母語とする日本語学習者は関係節の主名詞の再帰代名詞について、日本語のほうが中国語より制限されることを習得できるか、母語からの影響があるか真理値判断による実

験で模索した。計69名の日本語学習者を上級学習者と中級学習者に分かれ、データを分析した。

中級学習者は母語からの影響を受け、「自分」は関係節の中の主語を指すことができることがわかった。しかし、上級学習者は母語からの影響はあるが、日本語関係節の主名詞の「自分」は中国語の「自己」のように関係節の中の主語を指すことができないと考えるようになったことが判明した。要するに、中国語を母語とする日本語学習者はインプットがないものの、「自分」の解釈の制限が習得できることが明らかになった。なぜインプットなしに習得できたのかについては今後明らかにすることが課題である。

参考文献

- Aoun, Joseph, and Audrey Li. 2003. *Essays on the representational and derivational nature of grammar: the diversity of wh-constructions*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Crain, Stephen, and Rosalind Thornton. 1998. *Investigations in Universal Grammar*. Mass: MIT Press.
- Fukui, N. & Y. Takano. 2000. "Nominal structure: An extension of the Symmetry Principle." In *The derivation of VO and OV*, edited by Peter Svenonius, 219-254. Amsterdam: John Benjamins.
- Hasegawa, Nobuko. 1988. "Remarks on 'Zero Pronominals': In Defense of Hasegawa (1984/85)." In *Proceedings of Japanese Syntax Workshop: Issues on Empty Categories*, edited by Mineharu Nakayama and Wako Tawa, 50-76. New London: Connecticut College.
- Hoji, Hajime. 1985. "Logical Form constraints and configurational structures in Japanese." PhD diss., University of Washington, Seattle.
- Marsden, Heather. 2004. "Quantifier Scopepe in non-native Japanese: a comparative interlanguage study of Chinese, English, and Korean speaking learners." PhD diss., University of Durham, UK.
- Murasugi, Keiko. 2000. "Antisymmetry analysis of Japanese relative clauses." In *The syntax of relative clauses*, edited by Artemis Alexiadou, Paul Law, Andre Meinunger, and Chris Wilder, 231-64. Amsterdam: John Benjamins.